



開墾跡地に建つ開拓祈念碑



開 墾 地



集 落

-栃台開墾地-

1920(大正9)年頃、立谷沢村(現 庄内町)の人たちが入植者として三ツ沢の奥に入り、大変な苦勞をしながら畑地を開墾したのが始まりという。大豆などの豆類はよく取れたが、収入の中心は国有林の払下げによる「炭焼き」であった。

栃台集落は入植者たちが開墾しながら作ったもので、住宅のほか公会堂(公民館)なども建てたという。

当時の古口村でも遠く離れている栃台に人が暮らしていることは知られていないようで、国政調査によってその存在が明らかになったが、1932(昭和7)には分教場(分校と呼ばれる前の小規模な教育施設)も設置された。

1942(昭和16)年、栃台の人たちは悪条件の生活環境や将来の不安から満州国(現中華人民共和国北部に日本が建てた国)に移住することを決めて移り住み、そこでの開拓は順調に進んだが、第2次世界大戦での日本敗戦により1946(昭和21)年、帰国を余儀なくされ、再び栃台に入り開拓を行うことになった。

しかし、満州国移民により無人となって放置されていた栃台は荒れ果てており、畑地の整備や家の新築など懸命に努力したが、電気もなく、その生活環境は非常に厳しかった。加えて気温や水温の低さ、日照不足、やせ地のため作物は良く育たず、家計は炭焼きによる現金収入が中心でした。村役場による家畜での営農計画もあったが、色々なことがあって困難となったことから、栃台から離れる人たちが相次ぎ、1947(昭和22)年に設置された分校も1954年に廃止となり、1955(昭和30)年、栃台は再び無人となり、ついに開拓の歴史に幕を閉じたのである。